

鹿児島医セン

鹿児島医療センター（循環器・がん専用施設）

2009.1

vol.

34



平成21年を迎えて



あけましておめでとうございます。

私は昨年、平成が20年になり「成人」しましたので、「内外、天地と

も平和が達成される」という「平成」の理念が実現することを期待し、「儲からなくともいい、愚直に、正直に生き、生活し、仕事をする、そんな当たり前が評価される世の中であって欲しい」と述べました。しかし、昨年の秋以降、「金融危機」という激震に見舞われ、その影響は実体経済に及び、景気の後退、労働者の解雇など雇用不安まで起こっています。

「平成大恐慌」になりかねない中で、平成21年を迎えることとなりました。

医療界はこの未曾有の経済危機の前に、「医療崩壊」に見舞われ、公的病院が閉鎖されるなど、地域医療は危機に瀕しています。県内においても、自治体病院で困難な問題が出てきています。残念ながら厳しい年になりそうです。そうした中でも我々は医療を守り、提供したいと思っています。

医療崩壊も金融破綻、環境破壊、食糧危機もすべて根っこは同じではないでしょうか。このかけがえない地球という星を人類が我が物顔に破壊しているのでしょうか。立ち止まって考えてみたいものです。アマゾンで日系の方々が森林を焼き尽くし、開墾する農法から、自然の森に倣い、果樹の混栽で荒地に森を取り戻そうとする再生農法「アグロ・フォレストリー」に取り組み、成功をおさめているそうです。真剣に向き合っていけば我々ももっと知恵を出していけるのではないのでしょうか。

ところで当院はこうした厳しい情勢の中でも、医療を提供する側としての努力を引き続きやっていきたいと思っています。この1月より、循環器内科に不整脈治療・アブレーション治療の専門家を迎える

ことになりました。従来も、大学病院より応援を頂きながら、アブレーション治療は行っていましたが、今回常勤でその分野の専門家をお迎えしました。これで循環器分野は冠動脈疾患、心不全、不整脈治療等すべての分野で急性期治療、外科治療、更にはリハビリテーション治療の専門家を揃えて一貫した全面的治療が可能になりました。

がん部門は昨年11月より、がんの化学療法、外科、放射線治療、病理の専門家が集まって、一例一例を議論するキャンサー・ボードという検討会が始まりました。がんの診断・治療の病院として、やっと念願かなったと思っています。更に、この4月からは白血病などで化学療法、骨髄移植などを行い、治療効果の得られなくなった患者さんに新しい治療法として、細胞免疫療法（正式にはWT1パルス樹状細胞療法）を提供する準備を進めております。

脳卒中部門は限られた人員で、急患にそなえた24時間の対応を行っています。速やかな急性期治療で少しでも後遺症を残さない、軽くする治療に全力を挙げています。

看護部門は4月より7:1看護を導入し、手厚い看護の提供を目指します。更に、専門・認定看護師の育成に取り組み、質も良い看護の提供も目指しています。「医療崩壊」と云われるほど医療を取り巻く状況は厳しくなっています。今年、これ以上の「医療崩壊」が進行しないことを願い、我々も努力していきたいと思っています。

今年も宜しくお願いします。

平成21年1月 院長 中村 一彦



幹 部 年 賀 状



副院長 山下 正文

新年明けましておめでとうございます。皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

昨今、医療崩壊が叫ばれ、医師不足、院内暴力などが取りざたされています。当院も他より恵まれてはいると思いますが、診療科によっては医師が充足されていず、皆様にご迷惑をおかけしたことも多々あるかもしれません。なかなか好転の兆しはなく、いつまで続くのか定かではありませんが、今年も現在の戦力で頑張っていきたいと思っております。

昨年はDPCを導入し、今年フルオーダリング、フィルムレス、7対1看護への移行を計画しています。当院はまだ成長過程にあると思っております。皆様のご理解とご支援、ご鞭撻を本年もよろしくお願いいたします。



統括診療部長 花田 修一

明けましておめでとうございます。循環器、癌、脳卒中に関し、いつも多くの患者さんをご紹介いただきありがとうございます。

昨年は、診療機能向上のため、鹿児島大学病理学教室のご協力をいただき臨床病理科（野元 三治医長）を立ち上げることができました。自施設で病理診断が行なえることは診療面での機能向上に直結し、今まで以上に患者さんに安心、安全な医療の提供が行なえるようになってきました。また、4月からはDPC対象病院となりました。DPCによる在院日数の短縮もあって9月までは救急患者さんをいつでもお引き受けできる状況でしたが、その後の入院患者さんの増加により、12月には入院をお断りせざるをえない事態も生じました。救急については、一層の体制の充実をはかる予定です。

本年もご指導、ご支援どうぞよろしくお願い致します。



臨床研究部長 城ヶ崎 倫久

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては清々しい新年をお迎えの事と存じお慶び申し上げます。さて、昨年は国立病院機構鹿児島医療センター臨床研究部にとって嬉しいことが2つありました。まず一つ目は客員研究員として臨床研究部で3年間研究した市来智子先生が医学博士の学位を取得した事です。その業績が認められ、市来先生は現在アメリカ合衆国のメイヨークリニックに海外留学しています。もう一つの画期的なことは、当院が文部科学省の科学研究費補助金を受けることができる施設として正式に認定されたことです。今後も当院の臨床研究が発展する様に努力したいと思っております。本年も鹿児島医療センターの臨床研究部をよろしくお願い申し上げます。



地域医療連携室長 濱田 陸三

明けましておめでとうございます。皆様方には良き新年をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年は米国発のサブプライムローン問題に端を発して暗いニュースの多い一年でしたが、これをきっかけに米国型の市場原理主義、過剰な規制緩和が見直されることがあれば、今年は医療界にも少しは良いことがあるのではないかと期待しているところです。

昨年は「鹿児島医セン」をご支援頂き有り難うございました。今年もまた毎月お届けするつもりですので、昨年同様、診療の合間の息抜きなどにご利用頂ければ幸いです。

新年早々から脳卒中地域連携パスも具体化に向けて動き出すなど、診療連携も益々重要となってきており、地域医療連携室の役割も益々大きくなってきております。どうぞ今年もよろしくご支援の程お願い申し上げます。

クリスマスコンサートに参加して



12月13日(土)に鹿児島医療センターで行われたクリスマスコンサートに2年生15名、1年生18名が参加しました。

これまで、ボランティアとして参加することはありましたが、学生がクリスマスコンサートに参加するのは初めての経験でした。学生は、患者様や御家族が前向きな気持ちになれるように、また、喜んでいただけるようにと準備を行ってきました。今回は患者様が作詞・作曲された「むねIPPAI」と「明日への扉」を披露することになり、CDから楽譜を起こすことや放課後を利用した練習も、すべて学生だけで準備を進めていきました。

コンサート当日は、患者様や御家族に歌詞の素晴らしさを伝えたいという思いで作成したクリスマスカード(歌詞入り)を配布しました。心をこめて合唱し、たくさんの患者様や御家族の方に笑顔や涙ながらに聴いていただきました。また、当日は「むねIPPAI」の作者である患者様の曲に対する思いを聞く機会があり、患者様が入院して改めて感じた家族や周囲の人々への感謝の気持ちや入院中でも何かしたいという強い気持ちを知ることができました。学生にとって今回のコンサートは、学生間の絆を深めたことはもちろん、患者様や御家族の方々とのふれあいを通して、看護師を目指すものとして様々なことを考え、今後の学習の動機づけとなる機会になりました。

看護学校 吉村由美



ティーパーティへようこそ

当院の一年を締めくくるイベント「クリスマスパーティ」栄養管理室ではそれぞれのチームワークのなかで奔走し、次第にメニューが出来上がってゆきます。今年もケーキ・蒸しパン・ピザ・フルーツ・デザートなどピザ生地から全て手作りです。出来上がると待機していた看護学生さん達はケーキなどが壊れないようにシズシズと会場へ運んでゆきます。すると会場はクリスマスムード一色。まさに師走でやっぱり雰囲気がよくできています。小さい天使達も歌ったり、踊ったり、又司会者が患者様に面白くインタビュー

してゆきます。患者様・御家族も笑顔・笑顔、とても盛り上がっています。

それらが終わると患者様・御家族の足はティーパーティの会場へ。皆ケーキを頬ばったり、コーヒーを味わっています。注文が多くてコーヒー作りが間に合いません。このように私達は直接、患者様・御家族の方々に喜んでもらえる顔をみたり、おいしい・嬉しいなどの声を聞くうちに、自分達も顔が次第にほころび満足の顔をいつのまにかしていました。

今回もいつもの病院食以外に思う存分楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

飽食の時代だからこそ味や盛りつけの美しさを十分に楽しんでいただき、元気を与えることができ、そしてQOLを高めることができる。調理する側も、そんな毎日を目指したいものだと思います。

メリークリスマス！！

栄養管理室 調理師長 森元清志



ひとくち 診療メモ

メタボリックシンドロームと運動療法

心臓リハビリテーション（以下心リハ）対象者の中にはメタボリックシンドローム（以下Met S）の基準を満たすケースが多く見られます。牧田は心リハ実施患者の約30%がMet Sの基準を満たしており、この患者群は基準に該当しない群と比較して、有意に運動耐容能は低く、かつ頸動脈の内膜中膜厚（以下IMT）が肥厚していた、と報告しています。IMTの肥厚は冠動脈病変の程度と関連性があり、冠動脈疾患の予後予測因子としても重要であることがいわれていますが、佐藤らは維持期心リハ患者の日常の歩行距離とIMT変化の関連について検討し、一日4～6km以上歩いている群と6km以上歩いている群がそれ以下の群と比較して有意にIMTの退縮が認められた、と報告しています。冠動脈の動脈硬化進行を止めるための欧米の基準である身体活動量1500kcal/週以上を満たすには、一日の歩数に換算すると8500歩となり、距離にすると5～6kmになるといわれていますので、冠動脈疾患患者の動脈硬化を食い止めるための身体活動量1500kcal/週は、わが国でも十分達成可能で、一日約5kmの歩行が推奨されます。さらに厚生労働省が提唱している健康づくりのための運動基準には中等度以上の強度の運動を週1回（約60分）組み入れることが勧められていますので、日々の身体活動量アップに加え、楽しみとしてのスポーツへの参加などが望ましいといえます。新しい年、2009年を迎えました。お正月休みの間に少し食べ過ぎたおなかをさすりつつ、身体をこまめに動かして、今年も健康的に頑張りましょう！

<参考文献 牧田茂：日本臨床スポーツ医学会誌15(3)，2007>

（リハビリテーション科医長 鶴川俊洋）

登録医医療機関紹介のコーナーを始めました

掲載希望の医療機関は連携室までご連絡下さい。

■お問い合わせ先 独立行政法人 国立病院機構 **鹿児島医療センター**（循環器・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号 代TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246
<http://www.kagomc.jp> 脳卒中ホットライン ▶ **090(3327)5765**

【地域医療連絡室】 濱田・大渡・平田・中島・田添・吉留・善福
 直通電話▶099(223)4425 フリーダイヤル専用▶0120(334)476
 ※休日・時間外は当直者で対応します。

